

有坂秀世^{ありさかひでよ} (1909-1952) 言語学者・国語学者。広島県呉市三番町エ丁目73番地に生まれる。このとき、父鋳藏(しょうぞう)は海軍造兵中監(海軍中佐相当の技術科士官)として、呉海軍工廠造兵部長心得の職にあり、東京帝国大学工科大学教授と兼任し、造兵学第二講座と分担していた。

学習院初等学科, 東京府立一中, 一高を経て, 1931年3月東京帝国大学文学部言語学科と卒業。同年の卒業生に服部四郎がいる。

同年5月に「國語にあらはれる一種の母音交替について」(『音聲の研究第14輯』に掲載, 1931年12月。), ほぼ同じころに「音聲の認識について」(『同上』)と書いた。直後に肺結核となって, 8月神奈川県鎌倉郡腰越町の鈴木療養所に入所。再入所後の1933年後半に『上代音韻攷』(成書時期は1932~33年とされる。没後の1955年に刊行。)の「第三部 口奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」の原稿のほとんど2000枚(=百字詠)

と書きあげる。この間に重要な論文も発表された。「古事記に於けるその假名の用法について」(『國語と國文學』1932年11月)、「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『國語と國文學』1934年1月)は、「國語にあらはれる一種の母音交替について」を発展させたもので、古代日本語にも母音調和の名残ともいふべき段階が存在したことを明らかにした。

一方、音韻論関係の研究は、「音聲の認識について」にはじまり、「音韻に関する卑見」(『音聲學協會會報』1935年1月)、「『音韻に関する卑見』中の用語の訂正」(『同』1935年5月)、「音韻變化について(一)~(七)」(『コトバ』1935年11月~1936年5月)、「音韻論」(『音聲の研究第VI輯』1937年1月)などを経て、著書『音韻論』(1940年12月)となった。これを学位請求論文として、参考論文「アクセントの型の本質について」(『言語研究』1941年4月)抜刷を添えて、

1941年7月8日に提出，1943年5月6日付で文学博士の学位と授与された。

漢字音の研究は，万葉仮名の音価と決定せんがために早くからみられ，いわゆる重紐論（有坂の用語では「拗音説」）は，すでに『上代音韻攷』にみえる。「萬葉仮名雑考」（『國語研究』1935年7月），「漢字の朝鮮音について（下）」（『方言』1936年5月）と経て，「カールグレン氏の拗音説と評す（一）～（四）」（『音聲學協會會報』1937年11月，1938年3月，7月，1939年7月）において専論された。最終的に論文集『國語音韻史の研究』（1944年7月）において修正されている。中古中国語音に \dot{i} （前舌的） \ddot{i} （中舌的）の二種の介音と認める不朽の卓説であった。『國語音韻史の研究』に対して、日本学士院は，1952年2月12日，学士院賞と授与するに決定したが，残念ながら，同年5月12日の授賞式を待たずに，3月13日逝去した。東京都文京区白山の浄土宗・浄雲院心光寺に眠る。

〔文献〕

有坂秀世：『音韻論』（三省堂，1940）

有坂秀世：『國語音韻史の研究』（明世堂，1944）

有坂秀世：『上代音韻攷』（三省堂，1955）

有坂秀世：『國語音韻史の研究^{増補}新版』（三省堂，1957）

有坂秀世：『音韻論^{増補}版』（三省堂，1959）

有坂秀世：『語勢沿革研究』（三省堂，1964）

金田一京助：有坂博士の思い出（『國語學』第十輯，1952）

金田一春彦：有坂博士の思い出（『日本語音韻の研究』，東京堂出版，1967）

服部四郎：有坂秀世君の遺著「語勢沿革研究」と読みて（『語勢沿革研究』跋文，1964）

有坂愛彦・慶谷壽信編：『有坂秀世^{言語学著}述拾遺』（三省堂，1989）

慶谷壽信：『有坂秀世研究—人と学問—』（古代文字資料館，2009）

1.

拝啓 清明の候とりました。

清祥にてお喜びのこと柄します。

さて、貴学訪問の件、竹越氏の日帝かはきりして
かりいしやうと思つて、時間かすぎました。いまだらでは、
四月前半はむずかしく、四月、五月のゴールデンウィーク
は、はずしてと思つますから、宿泊の手配などのことも考えて、
五月後半になるでしようか。

そのときには、疲れを避けるため、三日の行程を考えています。

一日目、名古屋到着 二日目、貴学訪問

三日目、名古屋発、帰宅

のようです。竹越氏の週末のあいだによつては、日曜日に貴学
訪問としようと思つますが、日曜日に学内に入らるでしようか。
ところで、『日本語学大辞典』(東京堂多版)の有坂秀世
項目を依頼されました。大島先生にみていただきましたが、
六回目の手紙直後うしく、加筆訂正していただくま
でした。

皆さまに比正をお願いします。字数は二二〇字です。

ほかに書きたこともありました。結局、削りました。

『国語学大辞典』の執筆者は、金田一春彦先生です。
(参考文献)のところには、常助先生作の『略年譜』、著作
論文年表が挙げています。鈴木眞喜男氏作の『代
き韻文』のそれとものに、まちがひがあり、載せませんでした。
『有坂秀世研究』と『学問』の『有坂秀世博士略年譜
稿』に便ふべきだと思いますので。

2.

それでは、すろしくお願ひいたします。
健勝を祈らう。

四月六日

中村雅之 様

慶谷 書信

敬具